

前日から降り続いた雨で運動会の開催が危ぶまれましたが、当日は好天気にも恵まれ、無事に開催することができ、たくさんの保護者の方に観えていただけて、本当に良かったです。赤白に分かれての対抗戦だったので、「負けて悔しい」と、勝ち負けにだけこだわってしまう子どももいます。そんなとき「精一杯やった」「最後まであきらめずにした」「協力してできた」など、結果ではなく、過程の頑張りをほめて、その大切さを子どもたちに伝えてあげたいですね。



子どもとの対話で大切なこと

「相手が何も話をしてくれない」場合には以下の3通りがあります。もし、「あなたには話

- ①話したい相手ではないから
- ②今は話したくないから
- ③どう答えたらいいかわからないから

したくない」という心理的な抵抗がある場合は、その相手が『心理的安全性』を感じられるための基盤となる信頼関係を築く必要があります。「この人になら話したい。話

しても大丈夫。聞いてほしい」と思えるようになったら、『心理的安全性』があると言えます。

「ちっとも話をしてくれない」と思うときに、「今日はどうだった？何があったの？」「困ったことは必ず言ってね。」「何でも言いなさい。」と押しつけ続けると、結局「どうして話してくれないの!」と怒ってしまったり、話してくれないことを悲しんだり、心配したり、自分が悪いのだろうかと思ったり責任を感じてさらに悩んでしまうことになります。



自分が子どもの年齢だったころ、「親に何でも話せ」と言われ続けたら自分なら話したのだろうか? どんなときに話したくなかったらだろうか? と思い出してみてください。「すぐに話してほしい」と思うのは、自分の不安を解消したいからで、焦っているからかもしれません。「すぐに話してくれないとすごく不安だ」という不安や焦りの気持ちを持ったままだと、子どもは『心理的安全性』を感じられず、「今、話すのはやめておこう」ということになります。「何があったのか話して。どうしたの? 何で黙っているの?」と問い詰めるのはちょっとやめて、趣味でも仕事でも家事でも、お家の方が少しでも好きなことや、やりたいことに没頭してみてください。子どもにも「自分で解決したい」「自分で何とかしのぎたい」というプライドがあったりもします。子どものペースに任せて、話したくなるのを待ってあげてください。

「今日学校どうだった？」と聞いても、何も答えてくれない。「別に」「ふつう」としか返ってこないという声をよく聞きますが、こんなとき子どもは、話したくないわけではなく、どう答えていいかわからなくて適当に答えてしまっているだけの場合があります。「学校どうだった」と聞かれて、朝から下校までの一部始終を話す子どもなんていません。学校のことについて



GOOD 対応 具体的な内容

話を聞きたいと思ったら、子どもが興味のあることや答えやすいことから、具体的に聞いてあげてください。運動の好きな子なら、「大好きな体育があったんでしょ。今日は何をしたの?」、食べるのが好きな子には「今日の給食焼きそばだったんでしょ。おいしかった?」と具体的に場面を想像しながら質問すると、子どもは答えやすくなり、それ以外のことも話しやすくなります。

子どもに向き合うときは「ながら」をやめる

毎日が忙しくて、何でも「時短」「マルチタスク」の「ながら」になってしまいがちな私たちの生活ですが、気をつけたいのが、子どもが話しかけてきたときの「ながら聞き」です。結構ありがちなのがスマホを見ながら聞くことです。スマホを見ている大人は、すぐ近くにいても、一緒にいてくれないのと同じです。意識はスマホにいつまでもまわっています。いつも「ながら」で話を聞き流していると、話を聞いてもらえていないと不信感を抱くようになります。そうすると、子どもも顔を合わせ目を見て、大人の話聞くことができなくなってしまいます。短い時間でも、ちょっとしたことでも、スマホをしまって、子どもと一緒に過ごす時間をつくってみましょう。



「子どもの関心」に関心をもつ

「子どもの関心」に関心をもつとは、どういうことでしょうか。例えば、漫画が好きな子がいたら、「漫画に夢中になりすぎて、勉強時間が足りない」と評価判断をいきなりせず、「漫画に夢中だけど、どんな漫画が好きなのかな?気に入っているのは、



ストーリーかな?それとも登場人物かな?」などと、その子どもの目線でどんなことに関心があるのか、そして、その活動から、どんな体験をしているのか、どんな感情を味わっているのかについて、こちらの関心を向けて話を聞くことです。「子どもの関心」に関心をもつことは、信頼関係を築いていく第一歩です。自分の関心事を否定せず、関心をもってくれる人には心を開きます。